

益田東高等学校

二学年 青木 美奈子

私の住んでいるところは狐や狸が出てきます。庭先には熊の足跡が付いていることもあり、夜になると、猪や狐の方が車よりも優先的に走っていて、近所の人たちは猪を捕まえる罠を仕掛けるのに大忙し。バスや電車は一本も通っていない、森や山に囲まれた超田舎です。雑誌やテレビで見るとは違って、一生自分が生まれ育った地元には絶対に帰ってこない、決め、都会に夢を抱いていました。

ところが、その考え方がコロッと変わってしまいました。今の時代、お金で買えるものなら簡単に手に入るけど、そんなことよりもっと大切な何かがあるのだと、私に気づかせてくれたのです。それは、高校一年の夏休みにコンビニでアルバイトをしたことがきっかけでした。

私の母は足が不自由で、立ったりかがんだり動作に時間がかかり、働くことが困難です。そのため、アルバイトをして少しでも将来の進学資金をと思ったのです。でもお金を稼ぐのは大変なことでした。最初に突き当たった壁は、百種類も置いてあるタバコの名前がわからなかったことです。高校生だからわからないのは当たり前ですが、お客さん相手に「高校生だから」は通用しません。もたついていたら、お客さんに「ハアーツ」とため息をつかれ「チェツ」と舌打ちをされ、白い眼で見られたことが何度もありました。慣れないこともあり、精神的にも疲れて辞めようかと思ったりもしました。困っている私におじさんは「あーその右のやつ、青色の、それぞれ。」と一緒に探してくれ、「お待たせしてすみません。」と言うと、「気にせんでええよ。いつもありがとう。」と言ってくれました。おじさんは何気なく言った言葉だと思っただけ、感謝されることに喜びを感じ、その一言にすごく救われました。「母さん元気がね。」とか「夏風邪が流行つとるけえ。咳にはしそを入れた酒がええよ。」と、のど飴をみんなに配る人もいたり。コンビニの中はちよつとした地域診療所のようなでもありました。夏休み最後の日まで続けることができたのも地域の方々のおかげ。こうした何気ない心がこもった言葉がけのお蔭だったのです。コンビニの中で地域の人の強い結びつきや、人の輪が広がる温かさを感ずることができました。私の事を気にかけてくれる地域の皆さんの温かい心こそ、今の世の中で欠けている失いかけた心だと思っただけです。

今、テレビのニュースなどから感じるのは、隣にだれが住んでどんな人なのかも分からなくなりつつあるこの巨大都市化の落とし穴。母親が育児放棄をして幼い子供を餓死させたり、親の年金をもらうために、同じ屋根の下で暮らす身内が白骨化したまま、何年も放置されていたり、大切なはずの親が行方不明だったりとおぞましいニュースを、私は憤りを感じながら観ました。人として根本的に失ってはいけない大切な心が消え、狂っているようにも感じます。

私の父は電気工事の仕事をしている関係で、近所の家で電気の調子が悪いと聞いたら、家族で食事をしている途中でも、食べかけのまま出ていき、「ついでにいろいろ直して修理賃に貼ってもらった。」とニコニコ顔。母も町に買い物に行く時は、近くの一人暮らしのおばあちゃんを連れていったり、お年寄り歩いてるのを見かけると、声をかけて家まで送って行き、その家にあがりこんで、そのままお茶を入れたりする始末。また地元地域のみなさんで「火の用心」と声かけをしながら家々を見回りしています。おせっかいとも言えるほどの自分の思いを、しっかり人にやっつけている、そんな両親や地域の人たちを今ほとんども誇りに思います。今すぐにも都会で暮らしたいという思いでしたが、長閑で心温かいこの田舎と人が大好きになりました。地域の方々が作り上げるアットホームな温かい空間の中に私の進む道を見つけたのです。人と人とのつながりは、この田舎のど真ん中にこそあったのです。

私は得意げな顔で、いただいたアルバイト料の中から、一枚だけを母に渡しました。もちろん母は、お金以上の喜びを体いっぱい現し、初めて見るような輝く母の笑顔という「領収証」を受け取りました。…その夜母は、そのお金を小さく折りたたみ、竹の筒で作った「子ども貯

金に入れていたのを私は見ました。